

千夜一夜の頭痛物語 第一話 新型コロナウイルスの頭痛医療への影響その1

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu

このシリーズは、まさに人類未曾有の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行の真つただ中にスタートしました。各テレビ局はコロナウイルスの話題を取り上げ、医師やジャーナリストがそれぞれ異なる意見を唱え、東京オリンピック延期で話題が途絶える中、視聴率が生命線ともいえるテレビ局にとっては、まさにコロナ関連の番組はコロナバブルともいえる状況に陥っていました。

しかし未知のこの感染症に関しては、感染拡大が終息後、医学的もしくは疫学的、さらには経済的な、あらゆる側面から検討が加えられ、さらに治療経験から医学的検証がなされて初めてどのような対処が正しかったのか結論付けられるものと思われまます。

コロナ感染者の治療に当たる最前線の救命救急医療の現場では呼吸器が不足している、もしくは人工心肺装置が足りない、さらには軽症患者を入院させる病床不足など、まさに医療崩壊一歩手前の状況が発生しておりました。しかし真の医療崩壊は、コロナ感染症の現場ばかりではなく、他疾患の治療現場でも起こっていたのです。

例えばコロナ感染者が入院していると、怖くてその病院に通院できない、もしくは医療従事者がコロナに感染し、院内消毒のため、やむなく病院機能を一時的に停止せざるをえないなど、さ

まざまな問題が発生したのです。発熱していると院内に入れてもらえなかったり、救急でたらい回しにされたり、今までは想像しえなかった状況が全国各地で発生しました。

私の専門分野の頭痛医療に関しても、新型コロナウイルス感染者には一般的に解熱鎮痛剤や頭痛薬として汎用されているイブプロフェンやロキソプロフェン服用は好ましくないとの欧米の報告が報道されるや否や、頭痛患者さんたちは、自分たちが服用している頭痛薬を服用してもよいのか不安を覚え、つらい頭痛発作を我慢してやり過ごしていたという声が聞こえてきました。

その後、この新型コロナウイルス感染症はウイルス性の炎症により全身の血管に血管炎を起こし、このことから二次的に様々な合併症、例えば損傷を受けた血管内皮細胞に血栓が生じ、手足の末梢に血行障害による壊疽を起こしたり、心臓の栄養血管である冠状動脈に血栓を来して心筋梗塞を併発したり、さらには脳血管に血栓を生じ、神経細胞の虚血による脳梗塞や微小脳血管の破綻を来した結果、脳出血を起こして、恒久的に脳の機能障害が残ることが報告され始めました。

アスピリンやイブプロフェンなどの非ステロイド系消炎鎮痛剤は血小板の機能を抑制する結果、血栓を予防する機能が確認されており、私個人的には

新型コロナウイルス感染症に伴う血管炎の血栓予防の観点からこれらの非ステロイド系消炎鎮痛薬の投与は、決して病状を悪化させることはなく、むしろ病状の改善に向けて作用するのではないかと推察しています。いずれにせよ、今後の詳細な研究により真偽のほどは明かされていくでしょう。

Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーンケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、マミーズクリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。「頭痛女子のトリセツ」（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。



新刊「マンガでわかる頭痛・めまい・耳鳴りの治し方」
監修/清水俊彦 推薦/佐渡島博平
新紀元社（1,080円（税込）販売中。

